ジュネーブの国連欧州本部こそ 「慰安婦」を使った日本批判の震源地。 真実を求める日本人 11人が ジュネーブに乗り込み 反日 NGO(非政府組織)の策動を暴いた!

藤岡信勝編著

慰安婦の真実国民運動 2年間の国連活動の全てがわかる待望の活動報告。

広くまかり通っている。 今、世界では、日本軍が、20万人のアジアの女性を、強制連行し、性奴隷とした、という言説が、

デールという市の図書館の敷地には、ソウルの少女像と同じ像が立てられており、横のプレー の少女の像が立っている。アメリカのロサンゼルスから少し内陸に入ったところにあるグレン トには、「私は、日本軍の性奴隷でした」という自己紹介文が書かれている。 その象徴として、韓国の首都ソウルにある日本大使館の真ん前の道路の向かい側には、

ものであるとして部隊に提供した、と書かれている。 しのもとに、日本軍が20万人にも及ぶアジアの女性を強制的に調達し、これを天皇からの贈り アメリカの高校生が使っているマグロウヒル社の世界史教科書には、「慰安婦」という小見出

奴隷を囲っていたという言説が、まことしやかに浸透しているのである。 これ以上具体例を上げるのはやめるが、 こんな調子で、世界中に、旧日本軍が、

日本人の人権派弁護士が「性奴隷」という言葉を国連の人権委員会に持ち込んでいたことがわ この「慰安婦=性奴隷」説のルーツを探っていくと、一九九二年の二月に、戸塚悦朗という

制度」を糾弾されている。 替わり立ち替わり、五つの委員会の会期に合わせて、毎年のように、70年前の、 性奴隷制であったとしてやり玉に挙げられている。こじつけと言ってよいのだが、日本は入れ 委員会など十の委員会があり、そのうちの五つの委員会で、70年以上前の日本の慰安婦制度が 常設されているのがジュネーブの国連欧州本部である。人権理事会のもとには、女子差別撤廃 委員会を改組して発足した人権理事会(399ページの表参照)であった。その人権理事会が 積み重ねてきたが、その主要な舞台となったのは、人権委員会であり、二〇〇六年からは人権 かった。その後、国連は、いろいろな形で日本の慰安婦制度についての途方もない嘘の宣伝を 幻の「性奴隷

本的には変わっていない。 奴隷説を容認するかのような振る舞いを続けてきたのである。それは安倍内閣になっても、基 ところが、日本の政府=外務省は、事実に踏み込んだ反論を何らすることなく、かえって性

議会に請願・陳情したり、パネル展示会や署名運動に取り組んだりと、多彩な活動を展開して 時々の動きに対する見解を、 して「慰安婦の真実国民運動」が結成された。創立の日は、二〇一三年七月二十九日。国民運動は、 こうした状況に危機感を感じた、慰安婦問題に取り組む14の保守系団体が集い、連絡組織と 記者会見を開いて発表したり、シンポジウムを開催したり、地方

動として初めて調査団を派遣することにした。 きたが、二〇一四年の七月にジュネーブで開催された国連の「自由権規約委員会」に、国民運

そして、すでに、国政を動かすほどの成果をあげているのである。 やりたい放題になっていたが、「性奴隷」という言葉が国連に注入されてから実に二十二年ぶり に、保守系の民間グループとして、組織的・継続的に代表を派遣する活動が始まったのである。 の成果を明らかにしたものである。これまで、国連の委員会は、左派NGO(非政府組織)の 本書は、それ以来足かけ三年、三度にわたるジュネーブへの代表団の派遣活動を記録し、そ

きる。前半では、まず、序章で、「慰安婦=性奴隷」説がどのようにつくられ、国連に持ち込ま 住の方々を中心に書いていただいた。 に世界に広がった慰安婦問題の現状を、アメリカ、オーストラリア、ドイツについて、現地在 れたかを解明した。第一章では、そもそも国連とは何であったのかを、二人の専門家にご寄稿 いただいた。第二章では、二〇〇七年の米国下院議会における対日慰安婦非難決議以後、さら 本書は序章から第二章までの前半と、第三章から第六章までの後半の二つに分けることがで

の調査団の中心メンバーに、国連に乗り込んだ印象などを座談会形式で語ってもらった。第四 後半は、三回のジュネーブ行きを中心とした、行動と成果の報告である。第三章では、

呼びかけで締めくくった。 後の人権理事会で起こったことの追加報告と、国連の今後のスケジュール、国連活動参加への 発表されたので、合意内容の検討と国連での議論との関わりを明らかにした。第六章は、その いた国連に風穴を開けた様子を記した。第五章では、二〇一五年の暮、思いがけず日韓合意が 章では、第二次代表団から二人の女性の発言を計画し実行し、日本の左翼団体が跳梁跋扈して

お返しとなるよう、今後とも微力を尽くしたいと考えている。 本書が日本の名誉を回復する道行きの上で、少しでも寄与するところがあれば、それをもって 本書をまとめるに当たっては、たくさんの方々のお力添えをいただいた。篤くお礼申し上げ、

二〇一六年(平成二十八年)四月

満開の桜を想いつつ 藤岡 信勝

6

ジュネーブ国連派遣団報告

と拡散 — 12	2
藤岡信	藤岡 信勝
	12

〈第二章〉世界に広がった「慰安婦=性奴隷」の嘘

5 ドイツにおける慰安婦報道の論調	4 慰安婦像設置を阻止したオーストラリアのたたかい ―――	3 グレンデール市慰安婦像撤去裁判の展開と見通し	2 米議会決議の根拠とされた「田中ユキ」氏の著書	1/二○○七年米議会慰安婦決議から全米に波及 ――――
168	136	124	106	82
川口マーン惠美	山岡 鉄秀	目良 浩一	高橋 史朗	ケネディー日砂恵

〈第三章〉国民運動調査団、国連に乗り込む

第1次派遣・ジュネーブ国連代表団 (2014・7)

1| 行って分かった国連利用のカラクリ(座談会) 細谷清・山本優美子・藤木俊一・藤井実彦・関野通夫・(司会)藤岡信勝 184

2 戸塚悦朗氏との遭遇と対話

248

藤木

8

〈第六章〉露わになった「国連の正体」と今後の展望

2 | 国連・女子差別撤廃委への日本政府回答書をめぐる攻防

354

杉田

水脈

2 国連の仕組みと今後のスケジュール 1 国連人権理事会に乗り込んでわかったこと 388 372 細谷 藤木

3 国連に出かけ、発言しよう! 400 山本優美子 清

〈あとがき〉 418 藤岡

9

国連が世界に広めた「慰安婦=性奴隷」の嘘 一ジュネーブ国連派遣団報告

平成28年5月25日 初版発行

編著者 藤岡信勝

発 行 所 株式会社 自由社

〒 112-0005 東京都文京区水道 2 - 6 - 3 TEL03-5981-9170 FAX03-5981-9171

発 行 者 加瀬英明

印 刷 シナノ印刷株式会社

©Nobukatu FUJIOKA 2016 禁無断転載複写 PRINTED IN JAPAN 落丁、乱丁本はお取り替えいたします。 ISBN 978-4-915237-92-8 C0021 URL http://www.jiyuusha.jp/ Email jiyuuhennsyuu@goo.jp

【執筆者紹介】

(氏名の50音順。肩書き、最近の著書・論文)

加瀬英明(かせ・ひであき)外交評論家 『大東亜戦争で日本はいかに世界を変えたか』2015年(ベスト新書)

川口マーン惠美 (かわぐちまーん・えみ) ジャーナリスト (ドイツ在住) 『ヨーロッパから民主主義が消える』 2015年 (PHP新書)

ケネディー日砂恵 (けねでぃー・ひさえ) 主婦 (アメリカ在住) 「必ず出てくる『第二の吉田清治』」『WiLL』2015年1月号

杉田水脈 (すぎた・みお) 前衆議院議員 『なでしこ復活』 2014年 (青林堂)

関野 通夫(せきの・みちお)新しい歴史教科書をつくる会会員 『日本人を狂わせた洗脳工作』2015年(自由社ブックレット)

高橋 史朗 (たかはし・しろう) 明星大学教授 『「日本を解体する」戦争プロパガンダの現在』2016年(宝島社)

藤井 厳喜 (ふじい・げんき) 国際アナリスト 『紛争輸出国アメリカの大罪』 2015年 (祥伝社新書)

藤井実彦(ふじい・みつひこ)論破プロジェクト代表 『「従軍慰安婦」の真実』2014年(WiLL e-books)

藤岡信勝(ふじおか・のぶかつ) 拓殖大学客員教授 『虚構の南京 驚愕の通州』2016年(展転社、近刊)

藤木俊一(ふじき・しゅんいち)テキサス親父日本事務局 「米国立公文書館の史料発掘」『正論』2016年6・7月号

細谷清 (ほそや・きよし) 近現代史研究家 「『慰安婦』国連報告で崖っぷちの日本」『正論』2014年7月号

目良浩一 (めら・こういち) 元ハーバード大学助教授 Comfort Women Not "Sex Slaves", 2015. Xlibris

山岡 鉄秀(やまおか・てっしゅう)AJCN代表 「朝日が英語で続ける慰安婦『強制』プロパガンダ」『正論』2016年5月号

山本 優美子 (やまもと・ゆみこ) なでしこアクション代表 『女性が守る日本の誇り』2014年(青林堂)